

本間岳人 学位(博士)請求論文審査報告書

論文題目：東国中世石塔の考古学研究

本論文は、鎌倉に幕府が設置されてから江戸幕府が成立するまでの中世を中心とした時代に、死者を弔う追善供養ないしは造立者自身のための逆修供養として造立された中世石塔を扱ったものである。墳墓および墳墓標識としての石塔・墓石は、古くから考古学的研究の主要対象とされてきた。

日本考古学では、同時代文献史料の存在状況により、時代を先史時代と歴史時代に区分している。歴史時代の考古学では古代、中世、近世、近代の区分に従っており、各時代に特徴的な遺跡・遺物を研究対象としてきた。古代では宮都・国府・郡衙などの行政施設である官衙とこれら施設を結ぶ古代道路、寺院跡、中世では豪族層の居館跡、城郭跡と関連する墓地、近世では城下町としての都市遺跡、近代では産業遺跡がその代表的遺跡である。

また歴史考古学研究の重要分野の一つである宗教考古学では、石田茂作博士によって体系化された仏教考古学が主体的に研究されてきている。石田博士は「仏教考古学は、仏教関係の遺物遺跡を研究調査し過去の仏教を知ること」と定義されており、主要対象を寺院、塔・塔婆、仏像、仏具、経典・経塚、墳墓の六項に大別し、塔・塔婆は主要な構成要素の一つと位置付けられてきた。

日本仏教の揺籃期には木造塔が仏教伽藍の主要施設として建立されているが、石塔は奈良時代に造立が始まり、中世の各地で供養塔や墓塔として盛んに造立されている。各地に残されている石塔は、造立者としての仏教を信仰した有力者の存在を示しており、中世の地域史、信仰史を検討する重要な資料となっている。

特定地域に独得の造形の地域色をもって造立された石塔は、豊後国東半島の国東塔、山陰伯耆中部の赤碕塔、上野地域の赤城塔、奥州の平泉型宝塔などであり、それぞれに造立された地域名をもって命名され、造立の背景が追究されてきている。

石塔は板石造りの板碑と、五輪塔や宝篋印塔などの複数の石材を組合せた組合せ式石塔に区分されるが、関東地方においては埼玉県秩父地域から産出された板状剥離を特徴とする緑泥片岩を石材とした板碑が中世の供養塔婆として多数遺存しており、中世石塔研究の主体を占めてきた。関東地方に遺存する武蔵型板碑の総数は3万基以上であり、信仰の対象とした主尊にあわせて、偈文とともに様々な願意が刻まれており、中世史研究の重要な資料となっており、古くから研究されてきている。

中世石塔についての従来の研究では、特には刻まれた銘文が文字資料として重視され検討されてきており、石塔の形状には大きな関心が払われては来なかった。ようやく近年実測図を作製して資料化し石塔型式を検討する研究法が確立してきたものであり、石塔に使用された石材の科学的分析を基にした同一石材を用いた製品の流通状況も把握されるようになってきたものである。

本論文では、関東地方と周辺部を含めた東国において、中世を中心とする時代に造立された石塔を対象として考古学的検討を果たしたものである。従来、個別地域的研究に止まってきた板碑以外の組合せ式石塔を、広範囲に研究対象としたものであり、特徴的な石塔形式の出現と定型を、石塔に使用された石材と合わせて総合的に検討し、その造立背景を検討したものである。

序章の「研究の目的と方法」では、各地における中世石塔の研究史を整理して、中世石塔研究の問題点を把握し研究の前提としている。すなわち、精密な石塔の実測図を作製して資料として研究の前提とし、各地に所在する石塔の比較を行うことで東国の地域性を把握し、石塔の造立者や造立の背景となった信仰の内容を追及する方向である。

第1章の「東国における出現期石塔の検討」では、奈良時代から鎌倉時代中期に至る石塔の全体像を検討し、東国の中世石塔が12世紀後半の北関東に出現することを明らかにし、平安時代の層塔、鎌倉時代中期の五輪塔などの様相を検討している。

平安時代の層塔としては、上野国の山上塔と信濃の篠井塔が知られる。山上塔は延暦20(801)年に僧道輪が衆生救済のために造立した三重層塔であり、篠井塔は二重層塔である。造立の背景に天台教団との関連が考えられてきたものである。

笠塔婆は、上野国と信濃国で12世紀後半代から13世紀代にかけて造立されており、初期宝塔は信濃・下野・常陸国において13世紀初頭に造立された資料が確認されている。これらはともに北関東を主体とした造立状況であり、前代からの継承と考えられている。

第2章の「伊豆安山岩製中世石塔の成立と展開」では、伊豆安山岩製の五輪塔、宝篋印塔、宝塔、層塔の事例を集成し、基礎的検討と型式分類・編年を行っている。

伊豆安山岩は、箱根火山、伊豆火山に由来する火山岩であり、中世以降に石材として利用が活発化し、近世においては重要な建築資材としても多用されている。

石塔における東国と他地域との関係が明確になるのは鎌倉時代の13世紀後葉以降であり、真言律宗の東国への教線拡大と石工集団の東国下向による、畿内大和の石塔型式の伝播が認められる。これは東国の教団を主導した忍性に関連して1260年頃の常陸国筑波に初現し、1270年代以降の鎌倉周辺の宝篋印塔、五輪塔、宝塔、層塔などであり、石材としての伊豆安山岩を用いたものである。

宝篋印塔では、大和型式の影響を強く受けて東国における在地化が進み、型式変遷のなかで14世紀初頭に「関東形式」が成立し、幕府所在地の鎌倉を中心として周辺地域の石塔型式に大きな影響を与えている。

伊豆安山岩製の石塔造立は、14世紀第3四半期から15世紀第1四半期が最盛期であり、相模・南武蔵地域を中心として広く東国各地に分布している。また石塔型式は周辺地域において受容されており、広域に及ぶ「関東形式圏」が形成されている。

第3章の「中近世移行期の伊豆安山岩製石塔」では、戦国期から近世初頭における伊豆安山岩製石塔の型式変遷と石塔の造立背景を考察し、近世初頭に成立した「江戸型石塔」

の地方的展開を検討している。

17世紀初頭に独得の形状の大坂和泉砂岩製の石塔が関東地方にもたらされると、従来の伊豆安山岩製の宝篋印塔の形状は一変している。関西由来の新型式と関東の旧型式が融合して、独自の「江戸型宝篋印塔」が成立している。宝篋印塔は基壇、基礎、方柱形の塔身、隅飾りを有する笠と、長い相輪から構成されるものであるが、江戸型宝篋印塔は相輪下部に蓮弁を表現した請花と伏鉢が付加された特徴的な形状を示している。

伊豆安山岩製の江戸型石塔は、江戸周辺の東国各地に造立されており、強い影響を及ぼした点を明らかにしている。大名家の石塔では、下総古河藩の永井家、下野大田原藩の大田原家、奥州白河藩丹羽家、磐城平藩内藤家、越後新発田藩溝口家の墓石などである。

第4章の「石塔・板碑の地域的展開」では、特定地域内で組合せ式石塔と板碑がどのように共存展開したのかという点を、南武蔵の組合せ式石塔、南多摩地域の緑泥片岩製の武蔵型板碑、多摩地域の伊奈石板碑の様相で検討している。

南関東の中世石塔においては、鎌倉時代の14世紀代に定型化した伊豆安山岩製石塔が、造立階層の立場に応じた規模で広く造立された一方、在地石材を使用した石塔も各地で製作、造立されている。

南武蔵においては多摩地区で産出された砂岩である伊奈石製品であり、小形を特徴として五輪塔、宝篋印塔、板碑が製作され、多摩地区に供給されている。板碑は15世紀代の100年間を中心として80基の所在が確認されており、他の石塔も同時期に造立されたものと考えられている。地区に独得の、宗教的まとまりが想定されてきた資料である。

また品川の古刹海晏寺に所在する五輪塔を対象としては、石塔の海運移動や、造立者としての海晏寺中興の有徳人榎本氏との関連を想定して特定地区の歴史資料としている。

第5章の「日蓮宗信仰と題目石塔」では、日蓮宗信仰にともなう中世の題目石塔の成立と各地における展開状況を整理して、信仰集団の拡大とともに題目石塔が広範に展開する状況を明らかにしている。

また石塔における主尊勧請様式の分類に基づいて日蓮宗独自の信仰表現の変遷や門流による差異を確認し、池上本門寺、中山法華経寺、鎌倉大巧寺の事例を検討して、題目板碑の生産体制などにも言及している。日蓮宗石塔は、独特の七字題目によって特定されるものであり、板碑、五輪塔、宝篋印塔、宝塔、笠塔婆などが造立されている。

題目板碑は池上本行寺所在の板碑に認められる正応3(1290)年を最古とするものであり、以後に他宗派と同じく広く展開している。池上周辺の題目板碑の型式検討では、題目板碑以外の板碑に共通する要素の存在確認から、宗派に独得の工房は存在しなかったものと想定している。また宝塔では、池上二祖の日朗宝塔にも確認できる、円筒形の塔身の正面に上部の尖った区画を設けた合掌型宝塔が日蓮宗独得の形状であり、広く関東地方に分布する点を明らかにしている。

第6章の「外来系石塔・特殊石塔の検討」では、一石五輪塔、南関東に遺存している西

日本製石塔、水晶五輪塔を検討している。都内には少数の一石五輪塔が確認され、関西、東海、北関東からの搬入品とされるものの、本来的な所在地は不明な部分が多い。また西日本製石塔は、宝塔、層塔が知られ、中には関東製品の模範となったものも想定されている。水晶五輪塔は特異な存在であり、舍利容器として奉安された点を明らかにしている。

以上、本論文は鎌倉時代の14世紀代に畿内大和からの影響によって定型化した関東形式石塔の成立から展開、拡散状況を明確にし、その造立背景にせまったものである。特定石塔型式と政治・宗教などの権力との関係については、成立段階では特定権力との関係が想定されるものの、流通品として多数製作された普及段階では、製品流通の視点から特定権力との関係は希薄になったものと想定している。

東国における石塔造立の中心地は、12・13世紀代の北関東から、14世紀以降に幕府所在地の鎌倉の地に移動し、さらに17世紀以降には江戸に推移している。これは鎌倉幕府、江戸幕府という、石塔造立者階層の集中した政治権力の推移を反映したものとなっている。

また石塔に刻まれた銘文を資料として東國中世石塔造立を担った階層を検討し、有力氏族、守護、御家人、大名、国人領主など、時期や地域によって変遷する様々な支配者階層の関与を確認している。

以上により石塔の形状を対象とした考古学的分析にあわせて、石塔に刻まれた銘文を文字資料として総合的に把握し、石塔を歴史資料として位置づけて中世東国社会の様相の一端を明らかにしている。

石塔は仏教信仰に基いて、追善ないしは逆修供養のために造立されたものであり、造立者階層の追究は研究の主要課題の一つであり、分布、造立の背景把握は歴史研究の前提となる。この点は日蓮宗石塔を対象として検討しているものの、他の方面における追究は必ずしも十分ではない。しかしながら考古学的手法をもってする特定石塔型式の成立、展開、変遷過程の分析は、従来認められなかった広範囲に展開する資料を対象としたものであり、その成果は十分に評価することができるものである。

よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと審査委員会は判断し、これを認定する。

令和3年2月8日

主査 立正大学大学院文学研究科史学専攻

教授 池上 悟



副査 立正大学大学院文学研究科史学専攻

教授 野沢 佳美



副査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻

教授 寺尾 英智



副査 総合研究大学院大学

名誉教授 広瀬 和雄

